墨書土器を歩く～奈良県出土墨書刻書土器・文字瓦集成上下の刊行～

2021年３月と11月、埋蔵文化財ニュース185・186号として奈良県の出土文字資料集成（非売品）を刊行しました。思いの外多い、１万５千点近い資料が収集されたため、掲載対象は古代から中世の遺物１万144点に限りました。巻末には、少々欲を出して、概説と墨書土器刻書土器の出土地分布図を掲載しています。

分布図をながめてみると、資料の多くは、平城宮・京跡、藤原宮・京跡、飛鳥地域といった宮都の周辺に集中します。このほか、点々とつづく出土地の帯にも気づきます。これらは、京奈和道等、現在の主要交通路のほか、上ツ道、中ツ道、下ツ道といった古代大和の幹線道路と重なる傾向があります。

のみならず、墨書土器は大和盆地の「古道」に沿っても確認されます。例えば御所市では、古代の主要ルートとされる巨勢路だけではなく、５世紀末頃まで多用されたという風の森峠越や葛城・金剛山麓沿いに多く分布します。桜井市から宇陀市にいたるルートでは、主要道路の初瀬街道ではなく、むしろ笠間越え沿いの遺跡からの出土が目立ちます。こうした事実は、文字を読み書きできた古代びとの「活動範囲」を示すのかもしれません。

出土地の傾向はまことに興味深く、このところ休日を利用して、もっぱら古道を歩いています。土器に記された文字を現在の地名にみつけたり、遺跡の立地を体感したり、地元大和の遺跡に新たな発見が頻（しき）りです。私にとって、この集成は、地域に即して文字を読むという初心を、あらためて思い出させてくれる、またとない機会になりました。

（都城発掘調査部　山本 崇）

集成上下の表紙と出土地分布図（藤原京周辺）